

関寛齋

唐突であるが、関寛齋という人がいた。キ・カザイという。幕末から明治時代に生きた人で、同時代の近い立場にいた人にポンペ・松本良順・司馬凌海（伊之助）・佐藤舜海などといった人がいたが、このうちの誰をも知らないだろう、と思う。（司馬遼太郎「胡蝶の夢」）

寛齋は、千葉県銚子の近くの農村に生まれ、3歳のとき母親が死んだため、近所の寺子屋の師匠のところに養子にもらわれていった。83歳で自殺したのだが、徳富蘆花などと親交があった。

幕末、医者というのは、全て漢方医でろくな医学知識もない。（そのくせ）かりに、家の中に病人ができれば、死ぬまで家の中で寝かせておくだけで、もし医師にみせればその薬代のために一家揃って餓死するしかなかった。

母親が3歳で死んだ、と書いたのは、この人の一生にかかわりがあるからである。この人が後年「私の一生は、3歳までが一番楽しかった」と言った。母親は、自分も食うや食わずの境遇にありながら、近所にいた病気の乞食にごはんを作って持って行ってやったという。これが、寛齋が医師になった最大の動機ではなかったか。

23歳のとき、それまで千葉県佐倉の順天堂で学んだのち、銚子で開業した。（いわゆる蘭方医学である。）

さて、銚子の醤油問屋に浜口梧陵という人がいた。和歌山の人で、大津波があったとき、山の上において、村人を救うにも叫んでも聞こえない。さりとて呼びに行く時間もない。そばにあった刈り取ったばかりの稲の束に火をつけた。村人はびっくりしてとんでくる。で、多くの人が津波から救われた。臨機応変の処置で、「いなむらの火」として小学校の教科書で習った。今のヤマサ醤油の祖である。そして、地震を教訓にして防波堤を作り、これからはるか後年の南海大地震のときに役立って……この人は後年小泉八雲が、**Living God** とたたえた人で、米国旅行中に客死したが、寛齋が開業していたときにコレラが日本中に流行した。この時に「今のあなたの医療レベルでは、いかに蘭方とはいいい、西洋医学といっても患者をなおすことはできないだろう」……長崎に **Pompe** ポンペというオランダ人が来ている。この **Pompe** のところ（長崎医学伝習所）で学んできてはどうか、といて、百両貸してくれた。そこで養親と妻子のために 50 両を残し、自分は 50 両をもって、30歳のときに佐藤舜海らとともに長崎へ行った。舜海はこの当時世界でも最高レベルの外科医であり、**Pompe** も褒めている。この人の義理の父が佐藤泰然であり、佐藤泰然の実の息子が松本良順である。「胡蝶の夢」の主人公のひとりである。

関寛齋は、医師をしながらもまったくの貧乏で、佐倉にいるときから「乞食寛齋」と呼ばれていたが、尊敬もされていた。長崎でも新しい着物を買う金がないため、ツギハギだらけの着物をいつも着ていて、長崎の橋の下の乞食がびっくりしたという。

当時は、まだ幕府がしっかりしていたので、**Pompe** の弟子は、幕臣である松本良順のみで、その他の藩から派遣された人々は形の上で良順の弟子ということになり、良順が江戸

にいた頃から従僕であった司馬凌海（伊之助）という語学の天才と二人でオランダ語を訳しながらみんな勉強していた。司馬凌海は本当の意味での天才で、Pompe がオランダ語で話すことをときに即座に漢文で書き下すことができた、という。

長崎に病院をつくるというのが Pompe や良順の夢で、それが実現したとき入院費は良順が決める。みんな貧乏だったので、ほとんどの患者は無料であったという。（このあたりが松本良順の偉いところで、小生など、若い頃には、金持ちからは貪るが貧乏なひとからはなんとか医療費をとらずにすむ方法がないものかと考えていた。時代が進んで「一億総中流化」といわれるようになったし、保険制度ができたから、夢に終わってしまったけど）

さて寛齋、いよいよお金がなくなったので銚子に戻って開業する。しかし、浜口梧陵の勧めもあって、いやいやながら阿波徳島藩の蘭方医となって、しばらくしてから明治維新となる。日本中が戦争状態になり、松本良順は東軍（いわゆる賊軍）の野戦病院の院長となり、寛齋は逆に西軍（いわゆる官軍）の野戦病院長となった。

寛齋は、後年「高貴な単純さ」といわれたほど欲のない人で、戦争がすむとさっさと徳島へもどり、さらに銚子にもどって開業した。高い薬代もとらず、貧乏な人々にはタダで診療したが、休む間もなかったらしく、わずか3年で 50 両の借金を浜口梧陵に返し、残りの 50 両は梧陵が寄付してくれたから、その後はとりあえず自分たちが食べるぶんだけの診療費をとるのみで、少しも儲ける、という発想がなかった。奥さんがえらい人で、文句も言わずにずっと付き従った。

のち、北海道の斗満の荒地を開墾し苦勞したが、奥さんを先に亡くし、また徳島に住んでいた長男ともめたり（多分、ほとんど持っていないお金や遺産のことだったりしたのだろう）として、自殺してしまった。

日本中どこへ行っても、3歳のとき母親の背中でみた夕焼けの美しさに感動し、母親への想いととも、ずっと忘れなかったという。

小生にとっても医の原点ともいべき人で、この人こそ Living God ではあるまいか、とも思う。

Pompe van Meerdervoort(ポムペ・ファン・メルデルフォールト)について少し書けば、オランダでもそれほど有名でだった人でもなく、また、金儲けも目的とせず、教科書とノートブックをもって「未開」の日本に西洋医学（オランダ医学）を、体系づけた医学知識を、伝えるという使命感だけで来日した人である。ある意味今でいうボランティア活動のようなもの。オランダ医学の芽生えは、日本ではすでに江戸時代初期からあったし（Pompe が来る 200 年も前）、山脇東洋や華岡青洲などがでている。

しかし事実上のオランダ医学（蘭方）は、坪井信道と伊東玄朴の二人が開祖である。この二人は仲が良かったが、玄朴は金と権力に意地汚く、松本良順など終生嫌っていた。

坪井信道は、無欲で栄達を願わず、貧しい患者には、米・塩・薪などを与えるといった、まさに医は仁術を実践した。日本一の医師といわれて、ものすごく繁盛していたが、なく

なったときには、借金の方が多かったという。この人の弟子が緒方洪庵である。

松本良順は、十四代将軍家茂（仁孝）が亡くなる時、何日間も家茂に離してもらえず、居眠りだけでずっと看病し、将軍に「松本、そちは居眠りの名人だな」と言わしめた。明治時代になっても幕府に殉じた、清廉潔白な人であった。またおそらく、幕府関係者では初めてエタ・非人（現在の被差別部落のこと）の存在をなくそうとした人である。

さて、Pompe が帰国するとき、幕府は莫大な謝礼を贈り、感謝の念を表した。

Pompe が良順に言う、

医師にとって病人という対象のみがあるのだ。階級や貧富の差別は、医師の関知するところではない。

さらに、「松本さん、世の中でいちばん愚劣なことは、病者のために学んだ医学を立身の道具にすることです。それ以上におろかなことは、医学を道具に無用の金儲けをすることです。」

良順も寛齋も生来無欲恬淡で、終生この教えを守った。小生もこの Pompe の考え方に大賛成である。なるべくならそうありたい、と願っている。

なぜ、関寛齋の話をしたか少し説明がある。「安田病院事件」というのが明るみにでた。

この事件は、70歳をはるかに超えた安田某という理事長が、内科の病院2つ、精神病院1つを経営していた。職員の数を水増ししたり、精神科の患者に集団暴行して死なせたり、（この精神病院がひどくて、まるで豚小屋のようだった、という証言もある。）医療保険の水増し請求をしたりして、数十億円を荒稼ぎし、さらには金の延べ棒を何十本も隠していたり、とか。政治家に何百万円も献金して事件が明るみにでるのを防いでいたり、府の医療行政のOBにも金をばらまいていたりしていたらしい。

神戸でボランティアをしていたときに聞いたのだが、森功先生なんか、裁判まで起こされて本気で怒ってはった。（悪いことしてるくせに、看護婦や学生には感動するようなええこと言いよるんですわ）・・・この安田にしても、はじめは、無実と言い張っていたり、「私のお蔭で助かっている患者が何百人もいる」（事実一部はそのとおりではある）と開き直っていたが、結局罪をみとめた。墓まで持っていける金やないのにな。安田が嫌われたのは、スタッフのミスがあれば給料から天引きしたりして、彼らを大事にしなかったこともある。

その後も同様の事件が次々と摘発されるし、美容整形医の脱税など、日常茶飯事になっている。

すでに30年前に、180円の医療費を自家用車で集金にまわっていた開業医がいたし、私立の病院などは、どちらかといえば、初めから「利益を追求」するために建てられたところが普通である。私立大学医学部なども、それに近い。

こういう輩には Pompe や良順・寛齋の爪の垢を煎じて飲ませてやりたいが、幕末・明治の頃の医師にはそれだけ使命感があったのだな。それにしても、司馬さんが「〇〇は医師になるには欲が深すぎたのだろう」と書いたように、今日のような医療の荒廃はすでに

130年以上前から指摘されていたのである。

「現代医学で治せる病気なんか、ごく一部しかない。……あとは何をするか。……治療するフリをして、患者と社交しているだけだ。」これは、寛斎の言葉である。現在でも充分通用する表現である。だから、医師には、無用と思われるような知識も必要になるし、人格も要求されるのである。社交のためである。

無論、現在は100年以上前とは、状況は大きく異なっている。抗生物質があるし、抗癌剤もいろいろ発見されているし、手術の方法も進歩している。けれども、「安楽死」の問題もまだ解決されていないし、「手遅れ」のがん患者は、やはり治らないのが普通だし、まったく手のつけようもない病気も数多くあるし、病名さえついていない病気もいくらかもあるし、基本的には、幕末も平成も変わりはない。

1998.5.1.

(註；この文章は遠く離れたところにいる娘に向かっての手紙の一部である。しかし、今でも充分通用する内容だから転載したものである。)